

第 119 回横浜総会を終えて

伊豫 雅臣 Masaomi Iyo

第 119 回日本精神神経学会学術総会会長
千葉大学社会精神保健教育研究センター
千葉大学大学院医学研究院精神医学
千葉大学医学部附属病院精神神経科
千葉大学医学部附属病院こどものこころ診療部
国際医療福祉大学（現所属）

第 119 回日本精神神経学会学術総会を 2023 年 6 月 22 日～24 日に神奈川県横浜市のパシフィコ横浜ノースで開催しました。1958 年以來の千葉大学の主催ということで、千葉県の精神科医の皆さんのご協力を得て行いたく、副会長を日本精神科病院協会千葉県支部長の木村直人先生と、千葉県精神神経科診療所協会会長の志津雄一郎先生にお願いし、運営委員長を東邦大学医学部精神神経医学講座（佐倉）教授の桂川修一先生と、千葉大学大学院医学研究院精神医学准教授の新津富央先生にお願いしました。また、千葉大学精神神経科では、2000 年から「目の前の患者さんに最善の医療を提供し、将来さらに良い医療を提供できるように努力する」を理念としてきたことから、これを副題としてテーマを「今と未来を見つめる精神医学」とさせていただきます。

2019 年 12 月に中国からはじまった新型コロナウイルス感染症の流行によって日本精神神経学会学術総会も第 116 回は完全 WEB 開催となり、第 117 回と第 118 回はハイブリッド開催となりました。この第 119 回は、2022 年秋の時点では新型コロナウイルス感染症の流行の先行きにはまだ不明な点もありましたが、「皆さん、久しぶりに集まって話し合おう」という願いのもと、ぜひ現地を中心とした大会にしたいと思い、現地開催を前提に準備を始めました。幸いにも 2023 年 5 月 8 日に新型コロナウイルス感染症が一般的な感染症と同じ「5 類」に引き下げられ、現地開催の思いは叶いました。

パシフィコ横浜ノースは新しいカンファレンス会場で本総会のすべてのセッションを 1 つの建物の中で実施でき、

移動も便利で、皆さんが集まって話し合うには最適の場所だったと思います。結果、全国の精神科医および精神医療、精神医学に携わる方々にも多く集まっていただき、熱い討議をしていただくことができました。オンラインと会場を合わせて 9,539 名の登録があり、総会期間中の会場参加者も 5,736 名を数えることができました。やはり皆さん、新知見を共有し、課題について話し合いたいという強い希望があったことの現れだと思います。本当にありがとうございます。

さて、本総会では会長講演、特別講演 3 件、教育講演 10 件、「若手国際シンポジウム発表賞」（フェローシップ賞シンポジウム）4 件を含むシンポジウム 154 件、ワークショップ 10 件、口頭発表 164 件、ポスター 191 件など、数多くの発表が行われました。いずれのセッションも精神医学、精神医療の多様な課題、ニーズに基づいたものであり、多くの方々がそれらの解決に向けて熱心に取り組んでいることをあらためて実感できました。

会長講演は「応機展開の精神医学とその底流」と題しました。私はポジトロン CT などの画像診断法を用いた、統合失調症をはじめとした精神疾患の病態解明に興味があり、精神科医になりました。一方で、精神科医として臨床で患者さんの診療も行ってきました。今回の新型コロナウイルス感染流行もそうですが、社会的な出来事は人々の精神保健に大きな影響を及ぼし、日常の精神科臨床にも波及してきます。日々堅実な努力を要する精神医学では疾患の病因究明や治療法の開発は底流として当然重要ですが、社会から突き付けられる課題への対応も求められます。応機

展開は私の造語ですが、精神科にまつわるさまざまな社会的課題に取り組み、将来さらに良い方向にもっていきたいという思いが含まれています。会長講演では、私たちが行ってきたことなども提示して、将来役に立てていただきたいと考えてお話をさせていただきました。

さらに、3大会ぶりに海外から講師を招聘することができました。特別講演では3名の先生を招聘しました。Taylor, D.先生は、すでに第14版を重ね、邦訳も出ている『The Maudsley Prescribing Guidelines in Psychiatry』の著者で、まさにそのタイトルでご講演いただきました。Schmidt, U.先生は摂食障害研究の大家で国際医療福祉大学医学部の中里道子先生のご推薦で招聘し、「The Maudsley Model of Anorexia Nervosa for Adults: Development, Evidence and New Directions」と題してお話しいただきました。また、国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所の藤井千代先生の司会で、社会精神医学、司法精神医学を専門とする Szmukler, G.先生に「A non-discriminatory (mental) health law」というタイトルでご講演いただきました。偶然ですが、いずれも英国のモズレー病院の先生方でした。

会長企画シンポジウムとしては「統合失調症における抗精神病薬誘発性ドパミン過感受性精神病の克服」と「若手精神科医から見た世界の中の日本の精神医療の方向性」の2つを企画しました。統合失調症におけるドパミン過感受性精神病は近年治療抵抗性統合失調症の1つと考えられるようになってきました。私たち千葉大学では、2010年から基礎研究や臨床研究、疫学研究などさまざまな形で取り組んできたテーマです。残念ながら本邦では長期入院、抗精神病薬の多剤大量投与が長年の課題となつていますが、この病態の進展にはこのような背景が関与していることが強く疑われ、日本の精神医学・精神医療において解決すべき長年の課題です。このドパミン過感受性精神病に関するシンポジウムには、ドパミン過感受性精神病の基礎研究も行っているカナダの Samaha, A. N.先生に参加いただきました。また、特別講演もお願いした Taylor 先生はそのガイ

ドラインにもドパミン過感受性精神病をわずかですが取り上げられており、シンポジストとしてお願いしました。これらの先生に千葉大学の新津富央先生と金原信久先生を加えた4人をシンポジストとして討議していただきました。

ところで、グローバル化や人口減少、少子高齢化、AIの急激な進化など、多くの課題に私たち日本の精神科医はどう立ち向かっていけばよいのでしょうか。後者のシンポジウムでは海外での精神科関連の診療経験のある橋本望先生、マンゾッティ須美礼先生、清水加奈子先生に加えて、イタリアの若手精神科医である Campanile, G.先生に参加していただき、日本の将来の精神医療についてディスカッションいただきました。Campanile 先生はイタリアのボローニャ大学出身で米国への留学経験がありますが、千葉大学精神神経科に1年間臨床見学で留学されておられた先生です。異なる文化で行われている精神医療を融合し、新しい形の、より良い精神医療の発展が期待できました。

近年、さまざまな分野で新しい情報技術が導入されています。本総会では精神医学、精神医療の国際化がよりスムーズに進むようにと考え、精神科関連の学会では初となる、自動翻訳ツールを試用してみました。実際にはまだまだ改良の余地があると感じましたが、これをきっかけにこのような手法が前進していくことを祈念しています。

本総会の開催にあたって、運営委員やプログラム委員の方々、コーディネーターや司会、座長をお引き受けくださった方々、日本精神神経学会事務局の方々には、ご協力くださり、心より御礼申し上げます。ところで本総会の準備から実施、オンライン発信など、この総会の運営が円滑に進むよう運営事務局として細部に至るまで配慮し、ご協力してくださった株式会社コンベンションリンクージにも御礼申し上げます。

本学会が日本のみならず、アジア、そして世界の精神医学、精神医療の発展に大きく寄与していくことを祈念いたします。